ウィズコロナ時代の中小企業経営

歴史に学ぶ

第三十六回 震災から奇跡の復活～シャープ創業者・早川徳次

大阪経済大学特別招聘教授・経済評論家 岡田 晃

二〇二四年一月一日に能登半島地震が起きた。数多くの人が亡くなり、家屋の倒壊やインフラ寸断、避難生活の長期化など、深刻な状況が続いている。一日も早い復興を願わずにはいられない。

そんな中、かつて関東大震災で家族も財産も失いながらも復活を遂げたシャープの創業者・早川徳次を紹介したい。彼の人生を知って少しでも元気になっていただけたら幸いである。

壮絶な虐待を受けた幼少期～起業しシャープペンシル開発

一八九三（明治二十六）年に東京・日本橋で生まれた徳次は、満二歳足らずで養子に出された。母親が病気だったためだが、徳次は両親のことは全く覚えておらず、これが生涯の別れとなった。

養父母には大事に育てられたようだが、それもつかの間、二年後に養母が若くして亡くなってしまう。養父は間もなく再婚、ところがその再婚相手（継養母）は徳次を毎日のように折檻し、食事もろくに与えないような人だった。徳次の体は同じ年頃の子より一回り小さかったそうだ。

ある冬の日、何かに立腹した継養母は徳次を便所の壷の中に突き落とした。悲鳴を聞きつけた近所の人たちが徳次を引き上げ、一命をとりとめたという。

そんな徳次を不憫に思い、近所の目の不自由な女性が継養母のもとから連れ出して錺（かざり）職人に丁稚奉公に上がらせてくれた。八歳の頃だ。かんざしや装身具などの金物を手作業で加工する錺職人の仕事は徳次の性に合っていたようで、朝早くから夜遅くまで一生懸命働き腕を磨いた。

やがて一九一二（大正元）年、十八歳で独立した。きっかけは、ベルトに穴をあけずに使えるバックルを発明したことだった。徳次の初の実用新案で、「徳尾錠（とくびじょう）」と名づけ、大ヒット商品となった。ちょうど人々の服装が和服から洋服へと変わっていく時期で、徳次はそうした時代の流れもつかんでいたのだ。その後も持ち前の手先の器用さとアイデアで、次々と新製品を開発した。

中でも最大のヒット商品となったのがシャープペンシルだ。当時、繰り出し鉛筆と呼ばれる商品が出始めていたが、セルロイド製でこわれやすく使いにくかった。徳次は独創的な芯の繰り出し装置を発明し、金属製の新製品「早川式繰出鉛筆」を開発、特許も取得した（一九一五年）。さらに改良して極細芯の新商品も売り出した。これが「シャープペンシル」と呼ばれ、後の会社名シャープの由来となる。

当初は販売に苦労したが、その品質の良さから欧米で売れ行きが増え、国内でも注文が殺到するようになった。そこで自宅近くに新工場を相次いで建設、当時としては珍しい機械式で流れ作業の生産方式を導入した。数年後には従業員二百人を超えるまでに成長した。

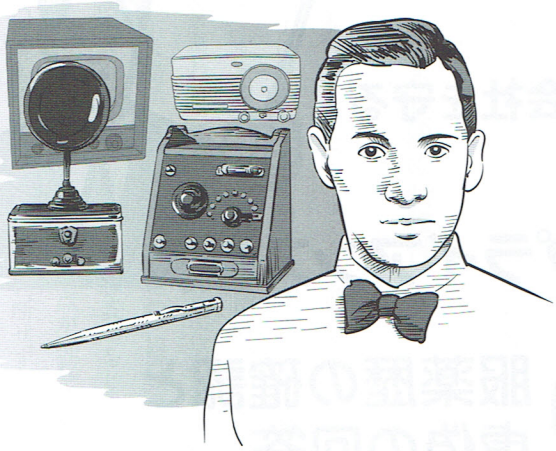
こうして事業で大成功を収め、私生活では結婚して二人の男の子も生まれた。幼少期の苦労が報われた思いだったろう。

関東大震災で再びどん底に 家族も財産も全て失う

ところが一九二三年九月一日、関東大震災が起きる。

本所の自宅と工場は倒壊こそ免れたが、火の手が迫ってきたため、徳次は妻子を一足先に避難させた。だが避難の途中で火事に巻き込まれ、二人の子どもが亡くなってしまったのだ。重傷を負った妻も二カ月後に亡くなった。徳次も火傷を負い、煙を吸って倒れた。九死に一生を得て助かったが、家族も財産も事業も、全て失ったのである。

そのうえ、大阪のある取引先が融資金の返済を迫ってきた。進退に窮した徳次はシャープペンシルなど全ての特許をその会社に無償で譲渡する形で借金を清算した。「虎の子」の特許まで失ったのである。おまけに、その会社からは「大阪に来て半年間は技術指導をしてくれ」と要求された。



夜行列車で東京を出発した時の気持ちを、徳次は自伝『私と事業』でこう振り返っている。

「あちらこちらと焼けた建物の跡が、夜の孤灯の影に黒く横たわっているのを新橋近くの車窓から見るともなく見ていた。（中略）今の夜汽車の中の心の冷えだけは、ただ十一月の夜気だけでないことを身に沁みて感じたのであった」（原文ママ）

だがこれを機に徳次は大阪での再起を決意。震災からちょうど一年後の一九二四年九月一日、大阪府東成郡田辺町（現在の大阪市阿倍野区）で早川金属工業研究所を設立した。この地は二〇一六年までシャープの本社だった。

創業時は金属加工の下請け仕事が中心だったが、日本のラジオ放送開始が決まったことに目をつけた。ちょうど知り合いの時計店主がいち早く米国から輸入した鉱石ラジオ受信機二台のうち一台を売ってもらい、従業員と一緒に分解して試作品づくりに挑戦した。しかしだれもラジオや電気の知識がない。苦労した末ようやく三カ月後に完成させた。国産初のラジオ受信機だ。

翌年ラジオ放送が始まると、新作のラジオセットに「シャープ」と名づけて売り出し、爆発的な売れ行きとなった。鉱石ラジオに続いて真空管ラジオを開発、輸出にも進出し事業を拡大した。

奇跡の復活に三つのポイント ～震災を乗り越える企業戦略

こうして徳次はよみがえった。奇跡的とも言えるその復活には、三つのポイントがあった。

第一は、どんな苦境にあってもあきらめない不屈の精神、そしてラジオの開発に見られるようなチャレンジ精神だ。

第二は、時代の変化と新たなニーズをいち早くつかみ、他人に先んじて新しいものを開発してきたこと。徳尾錠、シャープペンシル、ラジオなどがまさにそれだ。「人の真似をするな。人に真似されるものを作れ」が徳次の口癖だったという。

第三は、仲間の力だ。大阪で再起を図った時、東京時代の元従業員十数人が大阪にやってきて合流し、復活を支えた。ラジオの開発では、大阪の時計店主が全面協力してくれたように、社外の人たちにも助けられている。

さかのぼれば、少年時代の徳次を地獄から救い出してくれたのは、近所の目の不自由な女性だった。その女性はすでに亡くなっていたため恩返しはかなわなかったが、戦争で失明した元軍人などをシャープで雇用し、生涯にわたり福祉活動を続けた。

このような徳次の人生は、震災などさまざまな困難を乗り越える勇気と希望を与えてくれる。同時にこの三つのポイントは、今日の企業経営の基本に通じるものでもある。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇二二年、同特別招聘教授。新刊『徳川幕府の経済政策――その光と影』（PHP新書）。